

## 沖繩の始祖伝承

遠藤庄治

沖繩の説話は、歌謡や方言と同じように、地域によって、かなり大きな変化がある。そしてその差異は、王府の文化と直接的に結びついていった沖繩本島とその周辺の島々、沖繩本島から三百キロへだたる宮古諸島、宮古諸島から約百キロへだてて散在する八重山諸島の間に存在する。沖繩の始祖伝承の一部を紹介するにあたって、小論では、沖繩本島の伝承に限定し、文献説話と口承説話を対比的に紹介することにした。

沖繩諸島は、王府編纂の文献に多くの始祖伝承を残している。それらの文献の中から、最も多く、始祖伝承や王統に関する伝承を伝えている琉球王府の正史として編纂された『球陽』と、『球陽』と並行して王府が編纂した説話集の『遺老説伝』から、始祖伝承および始祖伝承に関連する説話をぬき出して見よう。

### 『球陽』

1、天地未だ分れざるの初、混々沌々として、陰陽清濁の弁有るに  
となし、(中略)蓋し我が国開闢の初、海浪氾濫し、居処するに  
足らず。時に一男一女有り、大荒の際に生ず。男は志仁礼久と名  
づけ、女は阿麻弥姑と名づく。土石を運び、樹木を植ゑ、用て海  
浪を防ぎ、而して嶽森始まる。嶽森既に成りて人物繁殖す。然れ  
ども当時の俗、穴居野処し、物と相友し、价傷の心有る無し、歴  
年既に久しく、人民機智ありて、物始めて敵と為る。時に復一人

の首めて出でて群類を分ち、民居を定むる者有り。叫びて天帝子と称す。天帝子、三男二女を生む。長男は天孫子と為る。国君の始なり、一男は按司の始と為る。(按司は即ち中朝の諸侯の類の如し)三男は百姓の始と為る。長女は君々の始と為る(君は、婦女の神職を掌る者の称なり。君君は、貴族の婦女數十人をして各神職を掌らしむ。故に之れを合称して君君と曰ふ。康熙の初、議して其の数を減ず。而して今数職の存する有り)。次女は、祝祝の始と為る(祝は亦神職を掌る者の称なり。諸郡諸村、各婦女の神職を掌る者有り。故に之れを合称して祝祝と曰ふ。今に至るも尚存す)。而して倫道始まる。

2、舜天王の父為朝公は、生得、身長七尺、眼は秋星の如し。(中略)公は伊豆大島に流さる。宋の乾道元年乙酉、公、舟に駕して以て遊ぶ。暴風遽かに起り、舟人驚恐す。公、天を仰ぎて曰く、運命天に在り。余、何ぞ憂へんやと。数日ならずして一処に飄至す。因りて其の地を名づけて運天と曰ふ。即ち今山北の運天江は乃ち公の飄する所なり。公上岸して遍く国中を行きて遊ぶ。国人、其の武勇を見、之れを尊び、之れを慕ふ。公、大里按司の妹に通じ一男を生む。居処すること久しく、故郷の念自ら禁じ難く、妻子を携へて還らんとす。乃ち牧港に至りて開舟す。数里を走り得て颶風驟かに起り、牧港に漂回す。数月を閲し、吉を扱びて開

洋するも、未だ数里ならずして颯風前の如し。舟人皆曰く、予聞く、男女同舟すれば、竜神の為に祟らると。請ふ、夫人を留めて以て性命を全うせんと。公、己むを得ず、乃ち夫人に謂ひて曰く、吾と汝とは情鴛鴦を結び堅く金石を失ふ。奈んせん天、人意に違ひ、俱に還ること能はず。乞ふ、汝、心を用ひて吾が児を養育せよ。長成の後、必ず大いに為す有るべし。言畢りて各涙すること雨の如し。遂に妻子と相別れ開舟して還る。夫人、児を携へ、浦添に前み至りて居る。児は尊教と名づく。

3、惠祖世主は乃ち天孫氏の後裔なり。当時、惠祖は、伊祖按司為り、善を行ひ徳を積む。然れども結褵の後、全く生育無し。晩天に至り、其の妻、日輪飛び来りて懐中に入るを夢む。既にして酸を喜び飯を悪む。惠祖科へらく、是れ前夢の徵有らんと。月既に満ち足り、臨辱の日、祥光異彩、屋中より雲端に直透するを見、并びに異光屋に満つるや、早已に一男子を生得す。惠祖、満心喜悅し、之れを愛し、之れを惜しむこと異宝の如く一般なり。當時の人、以て天日の子を為す。英祖、生れて聖明、賢と親しみ道を崇び、其の徳大いに著はる。歳二十五、義本の世饑疫並行し、民憂に勝へず國勢將に危からんとするに会ふ。英祖、命を奉じ、登りて國政を撰するに、饑疫俱に止み、人心始めて安し、政を撰すること七年、国人之れを仰ぐこと父母の如し。卒に義本の禪を受け君と為る。

4、奥間大親は何人の後裔なるやを知らず。常に農を以て業を為す。家貧にして娶ること能はず。一日、田を耕し、歸りて森川（泉名）に至り、手足を洗ふ。一婦女の泉に臨みて沐浴するを見る。容色絶倫なり。大親、意に想へらく、吾が村野中に、未だ当て此の婦を見ず。恐らくは是れ郡中より来たるや。亦何ぞ独り身此に

在りて沐浴するやと。暗々に歩み進み、樹蔭より之れを見る。其の衣、枝上に懸くるも、亦常人の衣に非ず。大親愈々疑ふ。窺かに其の衣を取り、荒草の内に藏し、故意に其の処に走り到る。婦女驚慌して裝を着け、仍、衣を穿たんと欲するに則ち衣有ること没し。（中略）日去り月来り十余年を歴、一女一男を生む。（中略）其の男子は即ち察度なり。察度長大す。是れより先、漁猟を好み、農事を務めて、或は四方に遊びて父の教に従はず。大親甚だ憂ふ。時に勝連按司に一女有り、才美兼ね備はる。貴族名卿の家、媒求する者極めて多し。父母之れを計るも、而も女子従はず。察度、之れを聞き、勝連に前み至り、按司に見えんことを請ふ。

5 A、巴志は生得、身体極めて小さく長さ五尺に満たず。故に俗に皆佐敷小按司と称す。其の幼年のとき嘗て与那原に遊び、鉄匠をして、劍を造らしむ。匠人農器を造るに急にして劍を造ること甚だ遅し、巴志屢々往きて問ひ求むるに匠人佯りて、劍を造るの状を為し、巴志還り去れば則ち止む。漸々にしてにして鍛錬し、三年にして後成る。巴志此の劍を得、一日、舟に駕して海に遊ぶ。忽然として、大鰻浪を翻して躍り来り、舟幾んど覆沈す。巴志、劍を按じて立つ。鰻魚畏れ退き敢へて侵さず。時に異國船有りて鉄塊を裝載し与那原に在りて貿易す。皆其の劍を見て之れを要む。終に満船載する所の鉄を以て之れを買ふ。巴志、鉄許多を得、百姓に散給して農器を造らしむ。

B、此の時、中山王尚巴志、金彩囿屏有り、粧飾甚だ美なり。他魯毎、屢次之れを要めて止まず。中山王曰く、吾聞く、大里に泉有り、名づけて嘉手志川と曰ふと。此れを以て、之れに換ふるは如何と。他魯毎喜びて以て之れを換ふ。

6、尚円王金丸、生れて賢徳有り、父を輔けて耕を為す。宣徳九年

甲寅、金丸年二十歳にして、父母俱に喪ふ。時に弟、宣威は五歳なり。金丸、憂苦し、農を以て業を為す。天旱に過ふ毎に民田皆涸れ、金丸の田のみ独水漫漫たる有り。人皆疑ひて水を盗むと爲し、常に金丸と睦じからず、成いは將に之れを害せんとす。金丸言の弁すべき無く、正統三年戊午、歳二十四のとき、竟に田園を棄て、自ら妻弟を携へて海を涉り国頭に至る。既に居ること数年、亦此くの如し…。

沖繩の王統は、1 神話的な天帝子王統、2 舜天王統、3 英祖王統、4 察度王統、5 第一尚氏⇨尚巴志王統、6 第二尚氏⇨尚円王統の順に展開される。右に掲げたものは、いづれも、これらの王統の始祖伝承である。

1 の天帝子の伝承は、天から降ったアマミキヨ・シネリキヨが島建てをして始祖となつたとする、『おもろさうし』や、『中山世鑑』『中山世譜』の伝承を引きついでたものであり、沖繩に広く見られる男女神降臨、もしくは、兄妹のみの生存や、移住による島建てと関連する伝承である。

2 の舜天王統の伝承は、これも沖繩に点在する源氏または平家伝説と関連する伝承であり、沖繩の豪族の処点となつた運天(北山)大里(南山)浦添(中山)に関連して語られている点が注目される。3 の英祖王統の説話は、奄美から宮古諸島までに伝承される日光感精説話と関連する話である。

4 の察度王統の説話は、沖繩の有力な話型である「天人女房」の話型であり、この話の後には、黄金を発見することが民間説話においては語られることが多い。

5、第一尚氏⇨尚巴志王統に関する話は、剣と鉄、金彩囲屏と嘉

手志川との交換を『球陽』では語るのみであるが、沖繩本島で伝えられる佐敷小按司⇨尚巴志の話においては、藁⇨箸⇨味噌⇨鉄⇨刀⇨屏風⇨嘉手志川と次々に交換する三年味噌型の「藁しべ長者」の話型で語られている。

6 の第二尚氏⇨尚円の話は、尚円の出生地である伊是名島の伝説「逆田」の採用と考えられる。

右にあげた伝承は、幾つかの共通点を持っている。第一は、それぞれの王統始祖に関して、時には超自然的な、時には、昔話の話型と関連する話型によって、権威づけがなされている点であり、第二に、それらのすべてが、民間に現在も流布されている説話のモチーフや、話型によっていることである。王権の交替が多かつた琉球において、それぞれの王権の正当化が説話によってなされ、その説話が民間においても受容されるといふ循環がここにはある。

『球陽』は琉球王府の正史としての編纂目的からして、その主要な始祖伝承が王統始祖伝承となることは当然であつた。他方『球陽』と並んで編纂が進められた『遺老説伝』には、王統伝承以外の始祖伝承がある。紙面に限りがあるので簡単に梗概のみを記したい。

『遺老説伝』

7、往昔、中国人が飄着し、中国に帰らず、国場村に住み妻を娶つて子供を生んだ。後渡嘉敷三郎を名乗り、真玉橋の東で瓦を焼いた。琉球の瓦はこれより始つた。其の子孫は、今も旧二月四日に其の先祖を祭る。

8、大里郡宮城邑に久場糖嶽があり、その下に、神名安真遠礼司といふ遠蘇古井があつた。その泉に時々光が天まで昇るのを見て農夫が見ると、天女が水浴していた。農夫は天女の衣を盗み、天女を妻とした。一男一女が生まれ、その男児は宮城地頭職となり、

女子は祝女となった。天女が死んだ後、久場塘獄大石の中に葬った。其の骨は今もあり、村人はこれを神として尊信している。

9、玉城郡百名島の白樽はすぐれた男だったので玉城按司は、長男免武登能按司の娘を妻に与えた。夫婦が山に登ると東に小島が見えたので、当時の戦乱をきらい小舟でその島に渡った。土地は肥えていたが、食物がなかったので貝を取って生きていたが、伊敷泊で神に祈ると、白い壺が波に浮んで寄って来た。白樽が取るうとしても取れず、妻が屋久留川で沐浴して、そのあとで伊敷泊の浜で衣をひろげていると白壺はその袖に入った。壺には、麦三種、粟三種、豆一種が入っていた。

10、昔、喜舎場公という人が、村を建てたので、喜舎場村と呼ばれた。今も毎年二月に、村長は皆其の墓を祭る。

11、今婦仁按司の子孫が、海辺の平らな安波根下口に隠居し、塩を造っていたが、やがて土地を開き、家を造り、やがて子孫がふえて数十の家が出来村となった。製塩の地なので塩平村と呼ばれ、毎年少子孫たちが、二、五、八などの月に祭りを行ない北山を拜む。

12、昔、中城郡喜舎場村に喜舎場子という人がいた。喜舎場獄に登って東を見ると小島があった。妹の真志良代と共に芥戒沐浴し、二人で舟で小島に渡った。島に着く時、喜舎場子は、津堅瀬と呼ぶ石を踏んで島に上り、妹真志良代は、祭瀬と呼ぶ石を踏んで島に上った。二人の間から生れた子孫が栄え、津堅島となった。二人が死ぬと、中之御獄に葬られた。

『遺老説伝』は、書名の通り、各地の古老の伝承する説話を記録したものである。ただし、動物昔話、本格昔話、笑話などは、ほとんど掲載されていない。恐らくは、古老によって真実が主張された。

話か、王府によって真実と認定された話をまとめたものであろう。従って、伝説集の性格が強い。

この『遺老説伝』における始祖伝承は、これもまた、ほぼ共通の性格を帯びている。第一に、その伝承が一門や、シマの始祖伝承に限定され、王統に関する伝承が排除されていること。第二に、祭り、御獄などの起源説話の性格を持つこと。第三は、島の創造や、天からの兄妹、または男女降臨の説話がなく、さらに沖繩に豊富な犬祖伝承が見られないことなどである。このことはあとにあげる口承説話との関連で考えるならば、王府が収集した古老の伝承の中には、そうした説話が当然含まれていたと考えられるが、収集整理や、編纂の段階でこれらの説話が、注意深く除去されたと思われる。すなわち、これらの説話は、王府の伝承と対立するものと判定されたと思われるのである。

#### 口承説話(A)

14 天より男女神が降り、田港の根謝屋の蒲葵の木の下で夫婦となり、その子供は各地に広がって行った。——大宜味村田港

15、兄妹が天から降ってくる餅を食べて暮すが、貯えるようになったため餅が降りて来なくなり、働くようになった。また鳥の交合を見、真似て始祖となった。——古宇利島

16、兄妹神が降臨、岩を互いに左右にまわり、兄妹のへだてをした後に夫婦となり始祖となった。——読谷村喜名

17、暴風で兄妹のみ生存、鳥の交合をまねて始祖となる。——各地

沖繩諸島には、多くの始祖伝承が伝えられているが、ここでは『遺老説伝』や『球陽』から排除されたであろう説話のみをかかげた。

14の男女神降臨の話は、読谷では兄妹として語られ、猫の交合を  
まねたとも伝えられている。また、那覇市内でも男女神降臨の話が伝え  
られ、伊是名でも降神岩伝説として残存する。

15の古宇利島伝説は、古宇利島内の伝承だけではなく、沖繩本島  
でもかなり広域に分布し、第二のモチーフである交合については、  
鳥のほかイルカ・人魚・海亀などを真似たとする伝承もある。

16の話は、記紀神話および先島の説話との関連が注目される。

17に類する説話としては、戦争で兄妹のみが生存し、動物の交合  
をまねて始祖となるとする説話が伊平屋島や、読谷村内でも伝えら  
れている。

これらの話は、『遺老説伝』に記載された始祖伝承よりも一層神  
話的な性格をとどめているが、同時に、ほとんどが、神そのものにつ  
いての語りを行い、説明的になっている点が注目される。おそら  
くは、単に、『遺老説伝』から排除されただけでなく、王府の神女  
制度による宗教統制とも対立する要素を持つからなのであろう。

口承説話(B) 犬祖伝承

18、戦争で劣勢な大将が飼い犬に敵の大将の首を取ってきたら望み  
をかなえようと約束する。飼い犬が敵の大将の首を取って来て、  
娘を所望する。長女、次女が拒み、三女が犬の妻になることを承  
知する。犬と三女は、舟に載せて流され宮古に漂着する。犬は、  
他に入って美しい男に変身し、夫婦となって宮古の始祖となる。

——国頭村、読谷村

19、飼い主が犬に、娘の翼を始末したら娘を嫁にやるといふ。娘が  
成人し結婚させようとするが犬が邪魔をするので、犬と娘は流さ  
れて宮古島に着き、宮古の始祖となる。——読谷村

20、王の娘が犬と密通し、島流しになる。宮古に漂着し、犬は洞窟

に入る。犬が人間に変身する途中娘に見られ、半分または、尾だ  
けが残る。半分犬のままの男と娘が、宮古の始祖となる。——国  
頭村・恩納村・読谷村

21、津波で女と犬だけが生き残り宮古の始祖となる。——大宜味村

22、男が宮古に漂着し、犬と夫婦になり宮古の始祖となる。——国  
頭村、大宜味村

23、東村川から犬を連れ来た男が、国頭の安波の地に来て村を建て、  
祖神として祭られる。

いずれも、犬祖伝承であるが、犬祖伝承と関連する説話である。  
注目されるのは、18、19が本土の犬掣入りと同一話型であり、しか  
も、本土の犬掣入とは結末が異なり、犬を殺すモチーフがない点で  
ある。更に23以外は、すべて宮古島の始祖伝承となっている点も注  
目される。

犬祖伝承が豊富に伝承されているのは、沖繩本島中・北部と、宮  
古島、与那国島の三地域であるが、これらの地域には、いずれも、  
犬祖、または、犬祖に関連する御嶽がある。沖繩本島は、読谷村楚  
辺の赤犬子宮であり、宮古では友利の御嶽であり、与那国は、組納  
に近い天蛇鼻の大神である。こうしたことからすれば、かつて沖繩  
本島においても、自己の始祖の伝承としての犬祖伝承があり、後に  
犬祖と宮古島始祖との関連が、沖繩本島で一般化し、さらに、犬祖  
伝承が不名誉なものと意識されるに至って、沖繩本島内の犬祖伝承  
は、宮古島に寄せて語られるようになったと思われる。23の話は、  
かつての犬祖伝承の残存ではなからうか。

ところで、沖繩本島内の犬祖伝承は、特に宮古島始祖に関連する  
多くの話型が、かなり豊かな表現をもって伝承されている。これは、

『遺老説伝』から意識的に排除されたであろう男女神降臨、または、兄妹の降臨型説話の表現が説明的で語りにも乏しいことからすれば、極めて対象的である。犬祖伝承は、『遺老説伝』から排除された点では、神降臨型説話と等しいが、この差異は、どこから発生した点であろうか。両者の違いは、神降臨型が、王府の伝承としては最も神聖なアマミキヨ、シネリキヨの沖繩の創造と始祖伝承に對立し、神女組織による宗教統制においても敵視されたのに対し、犬祖伝承は、非現実的な話として排除されたのとどまり、王府の伝承と積極的に対立する側面を持たなかったからではなからうか。特にその伝承内容が宮古島始祖へと変化した時、それは、自己に直接かかわる伝承ではなくなり、興味の対象となることで、いわば信じて語られる伝説よりも、昔話に接近したと思われるのである。

沖繩諸島の文献説話、口承説話の双方から、始祖伝承の一部を抜き出し、若干の検討を進めて来たが、沖繩の始祖伝承は、口承説話までを含めれば、きわめて多様である。そしてその多様さは、沖繩諸島内のみで自己完結的に閉鎖された世界ではない。沖繩県内のもう一つの説話の世界を形成する宮古・八重山の先島諸島、さらには、琉球孤から海で隣接する奄美および本土、中国、台湾および東南アジアの各地と結合する多様さであろう。

小論は、昭和五十四年十月、国学院大学を会場として行なった日本口承文藝學會、第三回研究例会での発表をまとめる予定であったが、紙面の関係で、「沖繩の始祖伝承」のうち、沖繩諸島に限定し、その内部の対比のみにとどめた。神話的伝承が口承説話としてきわめて豊富なのは、宮古・八重山の先島諸島であるが、その中の始祖伝承の紹介と沖繩全体の始祖伝承のまとめについては他日を期したい。

注1 沖繩国際大学南島文化研究所紀要「南島文化」二号に「沖繩の始祖伝承」—先島の文献説話を掲載。なお「先島の口承説話」については、同紀要三号に掲載予定である。

(えんどう しょうじ・沖繩国際大学)